

訂正版

(P2の17頁の回答
P6の最後の回答)

取扱い注意

9/1 17:03

プラント状況(本店レク) 議事メモ

情報共有

(6枚 非管理用)

NISA 班 ← プレス対応チーム

日時：平成23年9月1日(木) 11:00~12:15

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約25名(カメラ4台)

当方：原子力・立地本部

原子力運営管理部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ(水位・圧力・温度などのデータ)
- ・ 水処理設備セシウム吸着塔(ベッセル)水抜き作業 概略図【参考配布】
- ・ 4号機使用済貯蔵プール代替循環冷却システム フレキシブルホースからの水の漏えいに関する調査について【参考配布】
- ・ 試料採取・測定頻度と核種分析計画について(9月1日)【参考配布】

より以下の内容について説明。

質疑：

Q. 海底土のサンプリング箇所を拡大する目的は。

A. 魚介類への影響を考えるに当たって、これまで海水を中心に調査してきたが、今後は放射性物質が沈降した海底土の調査も広範囲に実施する必要があると考えている。

Q. 以前から魚介類に関して、調査する予定があったのか。

A. 魚介類に関する調査は着手できていないが、今後、文科省と相談しながら、30km圏内のサンプリングを充実させていきたい。

Q. 海底土の除染方法はあるのか。

A. 海底土に関しては今のところはないと思われる。

Q. 海底土のサンプリング箇所の拡大について、このタイミングで公表した理由は。

A. サンプリング箇所の追加は9月から新たに追加したのではなく、7月から行っている。今回、9月1日現在のサンプリング箇所と頻度を、改めて取りまとめたのでお知らせさせていただいた。最終的に環境への評価として、海生物への影響を評価する基礎データになると考えている。

Q. ベッセルの水抜き作業について、ベントとホースはどのようにつながっているのか。

A. ホースはベントラインからコンクリート製の遮へい壁を乗り越えて一本繋がっており、下にある受けタンクで出てきた水を捕水する。なお、ベッセルから鋼製の配管が上部に出ており、その先にホースが繋がるが、その前に弁がついている。

Q. 今後の再発防止対策はどのように考えているのか。

A. まだ具体的な再発防止対策ができていないため、今後検討する必要がある。今回の弁は開閉表示のないコック弁であり、ホースに対してコックが「直角で閉」「水平で開」という常識的な考え方に頼っていた部分があると考えている。

② 水平で開

Q. 4号機のフレキシブルホースの件について、ペローズとはどのようなものか。

A. 波を打っているところがペローズで、その先のラップジョイントの部分に溶接している。フレキシブルホースは薄いため、ホース周囲の網状に織ったもので荷重を支えている。

Q. 浸透探傷試験とはどのようなものか。

A. 特殊なインクを塗った表面を一度拭き取った後に、発色剤を塗布すると、傷がある場合に色で傷を示してくれる。ひびなどを調べる一般的な探査方法である。浸透探傷試験により、微小な穴を発見し、顕微鏡で拡大して確認した。応力などによる線上の傷などではなく、腐食性のある穴であると判断した。

Q. フレキシブルホースの腐食の原因は。

A. 4号機使用済燃料プールは塩素濃度が約 2,000ppm と高く、また、プール水の温度は 80℃ と高温のため腐食が促進し、穴が空いたものと考えている。

Q. 今後、4号機使用済燃料プールについては塩素除去しているため、フレキシブルホースにピンホールが開いた場合、交換で対応していくのか。

A. 基本的にはフレキシブルホースの交換で対応する。既に取り替えているホースについては温度条件が良いためリスクは少ないと思うが、はじめから使用しているホースは塩分濃度が高く、高温の水が通っていたため、腐食により水が漏れる可能性があると思われる。

Q. セシウム吸着装置の模式図について、作業員Aさんの赤いラインは何を示しているのか。

A. 飛び散った水をイメージしたもの。バケツをひっくり返して被ったようなイメージではなく、一部が飛び散ったようなイメージ。

Q. 抜き取った水をどのように運ぶのか、また、その容器の遮蔽はどうなっているのか。

A. 一時的に水を抜き取る容器なので、高濃度ではあるが量は少ない。どのような遮蔽策をとっているか等は確認させていただく。

Q. 高濃度の水なのにコンクリートの遮蔽等をしなくても良いのか。

A. 基本的に被ばく線量は線源からの距離、時間によって変わってくるものである。今回は水を被ってから1時間程度で除染処理をしているので0.16mSvの被ばく量であった。

Q. 本件を踏まえ、吉田所長が所員にメッセージを出したとの情報があるが事実関係は。
A. メッセージが出されたかどうかは分からないが、朝のミーティング等で管理者等へ周知されていると思う。

Q. 水を浴びた作業員A、Bは本日も同様の作業に従事しているのか。
A. 確認させていただく。

Q. 水を浴びた作業員A、Bはどのように免震重要棟へ戻ったのか。
A. 9時35分頃水を浴び、その時点で上にいた作業員Aはアノラックを脱いだ。その後、10時15分頃頃業務車で免震重要棟にある衣服の着脱をする場所へ戻り、下着を脱ぎウェットティッシュで体を拭いた。その結果、10時30分頃バックグラウンドレベルまで下がった。14時35分頃、Jビレッジへ戻り、WBCを受けている。

Q. 水を被って除染をする場合、同じような過程をたどらなければならないのか。
A. 現場には除染する設備はないので、一旦、免震重要棟に戻り対応することになる。

Q. 水を被った事象について、昨晩は詳細がわからず、本日になってわかるようになったのはなぜか。
A. 事態が起きて現場で確認していたが、昨日から今朝にかけて発電所、本店で整理し、本日、説明した次第。

Q. 昨日の段階でも聞き取りはしていたと思うので、昨晩の段階で同レベルの情報はお知らせできなかったのか。
A. 不十分な点は申し訳ないと考えている。昨日の15時頃にはWBCで問題ないことが分かっているので、事態の確認が遅かったかもしれない。今回は内部取り込みもなく、事態の対応としてスピード感が足りなかったのかもしれない。

Q. 弁の開閉表示がなかったとのことだが、作業員はどちらが開閉かの認識は持っていたのか。
A. 具体的に本人がどこまで認識していたのかは分からない。実際に水が出てきたので開閉が間違えていることに気づき、閉止したと思う。

Q. 水抜きをしている時は弁を開けたままにしているとのことだが、ホースを外す際、弁の閉止をせずにそのままホースを抜いたと言うことか。
A. どのような手順で作業したかは確認させていただく。

Q. 作業員Aは弁の開閉の向きが分かっているのに間違えたのか、もしくは、習熟が足りなく、手順や開閉の向きが分からず間違えたのか。
A. 確認させていただく。

Q. ベッセルから出る水の放射性物質の濃度は。
A. 漏れた水について濃度測定を行っていないが、タービン建屋の滞留水と同程度の10の6乗Bq/cm³と考えている。

Q. 漏れた水の量は。

A. 漏れた水の量はわかっていないが、ホース外してすぐ弁を閉じており、それほど多くないと考えている。

Q. 作業員Bが水を被ってしまうことを事前に想定しなかったのか。

A. 作業員Aはアノラックを着用していたが、作業員Bは梯子を支える作業のためタイベックを着用しており、水を被ることは想定していなかった。

Q. 水が漏れることは想定していなかったのか。

A. 通常の手順で作業を行えば、ホースと弁の間の残水が多少漏れることはあっても、下の作業員に降りかかることはないと考えている。

Q. 水が噴き出した原因はベッセル内の圧力抜きが不十分だったとの理解でよいか。

A. 圧力抜きが不十分だったかについてはわかっていない。

Q. 圧力抜き作業は作業員Aまたは作業員Bが実施したのか。または別の作業員が行ったのか

A. 圧力抜き作業は行っていないと思われる。なお、水抜き作業の前段階で弁がどのような状況だったかどうかは確認ができていない。

Q. 通常、当該の弁は開いている状況なのか。

A. 保管する場合には弁は開いている状態。

Q. 被水した作業員に限らず、水抜き作業前の状況で通常弁は空いているという認識があるのか。

A. どのような認識があったかについて詳細はわかっていないが、前段の作業でどのような弁の状況であったかが、重要であると考えている。

Q. ベッセル内の圧力が上がる原因は

A. 放射性物質の分解に伴う酸素・水素の発生である。

Q. 作業員Aは、今回の件についてどのように証言しているのか。

A. 作業員Aは弁が閉だと思ってホースを外したと聞いている。

Q. 作業員Aが今回の弁操作を行うのははじめてか。

A. 確認する。

Q. フレキシブルホースの穴の大きさはどのぐらいか。

A. 確認する。

Q. 急性白血病で亡くなられた方について、請負会社から東電本店へ8月16日に情報が入ってきたと思うが、統合対策室内でも共有されていたのか。

A. 本件について、統合対策室内で報告があったかは確認していないが、個別に保安院、厚生労働省、官邸へは報告している。

Q. 報告した際に、すぐに公表すべきなどの指示はなかったのか。

A. 指示があったかについては確認できていないが、作業との因果関係はないことから、最終的な公表は当社判断となる。

Q. 今後、白血病患者が増え集団訴訟になった場合、因果関係が認められる可能性もあると思うが、どのように考えているか。

A. 今後のことについてはわからないが、今回の件は作業の因果関係はないものと医師の診断報告を受けている。

Q. 医学上と法律上の因果関係は理解が異なるが、どのように考えているか。

A. 医学上と法律上の解釈についてはわからないが、労災の認定基準では、年間5mSv以上の被ばく、被ばくしてから一年間の潜伏期間がある、骨髄性急性白血病、リンパ性急性白血病というのが厚労省から出されている。

Q. 6月に汚染水の循環注水システムが始まってから8月末の時点でたまり水の量は減ったのか、増えたのか。

A. タービン建屋内に91,090トン、集中廃棄物処理施設に22,080トン、トータルで11万トン強ある。5月頃の高濃度汚染水量の11万トンから大きく変わってないが、タービン建屋の水位としては確実に下がってきている。O. P. 3,000の目標まで3号機は20センチ程度、2号機は46センチ程度まで下がってきている。6、7月に稼働率が上がらない時期があったが、見通しとして今後はたまり水を順調に処理できると考えている。

Q. キュリオンのベッセルはこれまでに何本交換しているのか。

A. サリーのベッセル3本も含め、156本交換している。

Q. 当初予定していた本数よりもかなり多くのベッセル交換をしているのではないか。

A. キュリオンは年内までに400本、予備で300本の貯蔵を考えている。

Q. 既に半分近く使用しているが、今後はサリーを使っていくということか。

A. サリーも並行して使う予定。なお、サリーの方が廃棄物の発生量は少ない。

Q. キュリオンのベッセルを半分近く使っているのは予定よりも多いと言うことか。

A. 2ヶ月で153本なので、発生量として極端に多いというわけではない。

今後の見通しとしては再検討しているところ。9月中旬から下旬にO. P. 3,000に到達し、その後、原子炉の注水量を増やす計画もある。その際、タービン建屋の水も増えるので交換ベッセル、スラッジ量も増えてくる。廃棄物を抑えることも含め、対応方針を検討しているところ。

Q. ベッセル交換作業を行っていたAさんの作業位置の高さは。

A. コンクリートの遮蔽高が約4m。

Q. 作業方法が非効率的で不安定と思えるがどのように考えているか。

A. 基本的にハシゴで作業する場合、1名が下で支えるというのは基本的なやり方である。

Q. ハシゴを固定化できない理由は。

A. 現場として危ないという声が出てくれば反映していくべきではあると思う。

Q. 厚労省から年間の被ばく量を250mSvから100mSvに戻すことを検討するよう文書が出されているが東電としての見解は。

A. 事故の収束に取り組む中で被ばく量は3、4月に比べると減りつつある。緊急時被ばくがどこまで適用すべきかは見直しを検討する時期と考えている。従って、厚労省から依頼があったので、私どもとしても具体的に線量の変更があった場合の課題等を検討してまいりたい。

Q. 社内に被ばく検討チームを設置するよう指示があったとのことだが、具体的にどのような組織を考えているのか。

A. 場所は本店と思う、発電所に対応している者も参加することになると思う。

Q. 100mSvを超えている作業員は現在何人くらいいるのか。

A. 103人。

Q. 200mSv超過している人数は。

A. 8人。

Q. 分母は。

A. 12,822人。

② 誤 12,822人

以上